



河合忠仁教授を偲んで

著者	奥田 隆一
雑誌名	関西大学外国語教育研究
巻	16
ページ	6-8
発行年	2008-10
URL	http://hdl.handle.net/10112/2531

河合忠仁教授を偲んで

奥田 隆一

河合忠仁教授がこの6月急逝されたという知らせは、あまりにも突然で、それを聞いた時、もう少し早くお会いしてお話しできる機会を作っておくべきだったと後悔の念が頭の中を巡った。というのも、河合先生の後任として和歌山大学から関西大学へ赴任して来たのであるが、新任人事が急遽決定したため、和歌山大学でのいろいろなことが整理できないままになっていて、それが終わり次第、連絡を取り、いろいろお話をしようと考えていたからである。

実を言うと、河合先生の訃報を受けとったのは、和歌山大学の私の旧研究室の中だった。関西大学での授業を終え、研究室の最後の後片付けをしに和歌山大学まで行き、ちょうど最後の整理が終わろうとしている時に訃報を受け取った。河合先生の後任ということで、関西大学の私の研究室は河合先生の使用されていた研究室だったので、このことを、「あの研究室で研究したかったが、病のため研究室を去った。奥田に研究は任せたぞ」というメッセージだと解釈することにした。

河合先生は私より8歳年上だが、現場の教師をした後、英語学を学ぶため、神戸市外国語大学の大学院に入学した。そのため、ちょうどその時期に私も大学院にいたので、ほとんど同級生だと言っていいくらいである。ただし、河合先生の指導教官は増山節夫先生で、私の方は小西友七先生ということで、小西先生の授業の時に顔を合わせるだけの間柄であった。

ところが、その後、大学院を終了してから2年後に近畿大学に就職する時に、一緒に採用されたのが河合先生であった。採用が一緒だったことと、英語学に興味を持っていたため、年の差を無視して気楽に、英語の表現になどについていろいろな意見を交換し、私の方は、「英語学から英語教育を」、河合先生の方は「英語教育から英語学を」それぞれ論じて行こうと話し合ったことが鮮明に思い出される。仕事以外でも、スポーツ好きの先生にスキーをしないかと誘われて何度か旅行した。学生にも声をかけられて、学生とも一緒に何度か旅行したこともある。いつも中心になってみんなを引っ張っていった河合先生を思い出す。

教養部に就職したため、専門科目の授業が持てないのが少し不満だったが、河合先生の方は教職教育部に移られ、英語教育の責任者になられた。英語教授法はもちろん、英語学や英文法の専門科目を教えられていたのをうらやましく思っていると、私に教職科目の音声学を教えな

いかと声をかけて下さった。これにより、教養部所属でありながら、専門科目も教えることができ、一層やる気が出たのを思い出す。この時の学生は、河合先生の熱心な指導のためであろうが、専攻が法学や経済学なのに、中学校の英語の先生になり、今も現役で活躍している者が多数いる。

1998年の後期より、私が和歌山大学に移ることになり、河合先生に話したところ、自分も近大をやめて他の大学に移りたいと言われたのを思い出す。私の方は、8月の割愛がうまく行かず、半年転出が遅れた。その間に、河合先生も関西大学に移ることが決まり、19年間勤めた近畿大学を一緒にやめることになった。河合先生は関西大学へ移られてから、精力的に研究を本にまとめて出版したり、大学用のテキストを何冊も書かれた。英語コミュニケーション学会の関西支部長から、副会長にもなられ、本当に、充実した研究生生活を送っていたと思われる。

しかし、運命のいたずらであろうか、その後、癌で入院されることになったのである。見舞いに行った時に、「癌が転移しているかもしれない」と悲壮な表情で我々に語られたのは今でも忘れられない。あれは、自分の将来計画が台無しになるかもしれないという絶望感の現れだったと思われる。というのも、河合先生は何事においても、きちんと計画を立て、こつこつと地道に実行して行く人だからである。つまり、あの時には既に自分のこれからの人生を計画していたと思われるからである。それは、授業の準備をみれば明らかである。河合先生は、私と違い、授業の準備を完璧に行わないと気がすまなかった。時には、異常と思われるほど、きちんとするのである。授業時間の何倍もの時間をかけて準備をしていることも何度かあった。また、近畿大学時代は、いつもお会いするたびに、河合先生は自分の将来の計画を語られていた。将来、こういう本を出版したいとか、こういう研究をしたいとか語られていた。それを考えると、河合先生の悲壮な気持ちが手に取るようにわかる気がする。

その後、闘病生活が始まるのだが、授業好きの河合先生が病のために授業できなかつたり、きちんと予習できなかつたりして、非常に苦しんだと思われる。授業も出来ないくらいになり、入院されたと聞いたが、私としては、先生の絶望感を思い、見舞いに行ってもどう言葉をかけてよいか分からず、結局、音信不通になってしまった。今でも、見舞いに行くべきだったか、行かないのがよかったのか、自問しているところである。

河合先生が関西大学に移られて9年経ち、病気のため関西大学を去られることが決まり、その後任に私が来ることになった。河合先生との間に不思議な結びつきを感じる。

その河合先生も亡くなれば、今、河合先生のことを思い返してみると、本当に英語が好きだった先生が思い出される。高校生の時にAFSでアメリカに留学し、いろいろなことに興味を持ち、英語で話したり書いたりすることが非常に好きだった先生。英字新聞に英語で投稿しては、それを得意げに私に見せていた河合先生。英作文のテキストや自分で本文の英語を書いたテキストを作成し、外国人と英語で楽しげに会話をしていた姿。そして、自分の意見を絶対に曲げない頑固な河合先生。しかし、学生に対してはいつも優しく接している先生を思い出す。

最後に思い出すのは、「人間は死なない」ということが書かれているエッセイを読み、自分は感心したと語られていたことである。「なぜ、人間は死なないかわかるか?」といつもの調子で質問された。分からないと答えると、「人間は遺伝子を子供に送ることで生き続けるんだ」と説明された。そのとおり、2人のお子さんの中で河合先生は生き続けていると思われる。さらに、私は「遺伝子」だけでなく、「教育」というもので「人間は生き続ける」と考えている。つまり、河合先生の授業を受けた学生や、著書を読んだ人の中に、河合先生の考え方がある種の「遺伝子」のように生き続けると思われるのです。河合先生の英語に対する考え方と、学生に対する接し方が、これからもずっと生きていくように祈りつつ、ここで追悼の文を終えたいと思います。

合 掌